

2009年研究紀要抜粋から 大阪大学高橋綾先生 3日間の公開授業 相互問答法をやってみよう。

公開授業	11月2日(月)	4校時	5年2組	教室
	4日(水)	3校時	5年2組	教室
	6日(金)	5校時	5年2組	教室

研究全体会	11月2日(月)	事前研	3時50分より	今回の授業について
	6日(金)	事後研	3時50分より	3日にわたっての授業について

これまで、「こどもの哲学」では、絵本を使った授業を行ってきた。物語から感じることを子ども達が自由に意見を話す、フリートークの授業であった。しかし、フリートークの授業は難しいので、なかなか取り組めないという職員の意見があった。そのことを本間先生にお伝えしていた。いきなりフリートークをするのは大変なので、フランスのオスカルという方が提案されている問答法を使ってみるのはどうだろうと提案して、頂いた。そこで今回は、阪大の高橋先生に5年2組で、その問答法を使った授業を3日間にわたり公開することとした。

オスカルさんの授業（相互問答法）の解説とやり方を簡単に書いたものを添付してお送りします。一読しただけではわかりにくいと思いますが、意見をたくさん場に放り出す議論ではなく、問いと答えを積み重ねていく「問答」という形で、こどもたち同士と一緒に考えることを目指しています。（先生は問答の形式をサポートするだけで、ほとんど介入をしません。）いままで、小学校や高校、少年院でも試みましたが、けっこううまく行っているように思います。

(高橋綾先生のメールから)

今回の3日間の授業公開は、担任ではない方が授業を行う。担任には自分のクラスをよく観察して頂き、一人一人の子どもの変容を報告してもらうことにした。また、参観される方々にも子どもの変容に視点を置いて観察してもらった。

「相互問答法」をやってみよう

大阪大学 高橋 綾

教材 オスカル・ブルニフィエ『こども哲学』シリーズより

(『自分って、なに?』 『いっしょにいきるって、なに?』)

実施日	ポイント	テーマ
1 1月2日(月) 4時間目	「質問ゲーム」に慣れる	「はやく大人になりたい?」
1 1月4日(水) 3時間目	質問をよく考えてみる	「ぼくたち、みんな平等?」
1 1月6日(金) 5時間目	問答を通して相手の主張を理解する	「ぼくたち、みんな平等?」

オスカル・ブルニフィエの相互問答法

進行役に特別な技能なしでも、生徒たちの自発的な対話を促し、問いと答えを通して互いの考えを吟味するのに役立つ方法。子どもから大人までひろく用いられている。

目的

普段の会話では、相手の話をよく聞くために何度も質問をすることはありません。この方法では質問を通して相手が何を考えているのかを的確にとらえ、一緒に考えます。

・どの答えが正解?

→厳密にはどの答えも不十分かもしれません。大切なのは何が足りないのかを明確に表現できるようになることです。何が分かって何が分からないのかをはっきりさせることが目的になります。

(参考:「批判的思考」を身につける。)

・なぜ質問するのか?

→意見の言い合いでは、問答は成り立ちません。いきなり意見をぶつけられても、何と答えてよいかわかりません。「質問すること」は、相手に関わろうとする基本的な態度です。私は知らない(分からない)ことを相手に聞く、という態度が大切です。

・質問するのは難しい?

→簡単ではありません。なぜなら、相手は自分と異なる前提や仮設に立っている可能性があるからです。この問答法では質問された人が理解できるか、答えられるどうか基準に進めます。進行役の問いかけ「今の質問の意味は分かる?」「答えられますか?」

長ったらしい質問より、「はい/いいえ」で答えられる質問から始めるのがコツです。

・この問答法でなんでもできる?

→どんな方法も万能ではありません。この問答法では、質問する側の意見を十分に吟味することができません。教師(進行役)が見本となる問いかけをしてみせることも必要です。

- ・途中で言いたいことが分からなくなるのはなぜ？

→話すこと、聞くことを通して初めて「自分の考え」が明確になります。手をあげて話しているうちに、自分が何を考えているのか、言いたかったのが分からなくなるのは、普段と違うように考えはじめたことの証です。発言者が口ごもっても、じっと待つか、次に当たるまで考えるか、他の人に「この人の言いたいことが言えるひと？」と質問したりしましょう。

- ・子どもたちが「不適切」と思われる発言があったら？

→私たちは考えを伝えるのに、まずどこか聞いたことのある言葉が無意識に使ってしまいますが、多くの場合それはよく考えてのことではありません。本当はその人は何を言いたいのか、言い換えるとどういうことなのかを質問者に問い返すことも必要です。

10月30日（金） 大阪大学

大学院の授業に参加し、オスカルの間答法を実際に見せて（体験させて）もらいました。哲学を学んでいる方たちのやりとりなので、非常にレベルが高く、自分が質問されたらどうしようかとドキドキしました。答える人の矛盾点を突いていくような質問がされていて、正直子どもたちでやってみるとどうなるのかという想像がまったくできませんでした。自分のクラスの子どもたちが果たして質問できるのか、答えられるのかを考えてかなり不安になりました。

2日（月）の一回目のテーマを何にするかという話になった時、子どもが発言しやすいテーマにしてほしいと思いました。（難しいテーマで教室がシーンとなっているところが思い浮かびました。）

『早く大人になりたい？』という問いなら、子どもたちも答えやすいのではと思い、その問いにしてももらいました。

もう一点心配したのは、質問に答える子どもが質問の集中攻撃にあってつらい思いをするのでは、ということでした。考えに対する質問というふうに捉えることができれば良いのですが、自分自身の否定と感じてしまうかもしれないと思いました。がんばって答えようとした子どもが、こんな授業嫌だ、もう答えたくないとならないよう、進行役が配慮することが必要だと感じました。

① 11月2日（月） 『早く大人になりたい？』

答えやすい問いを選んだからか、いつもの授業以上に手が挙がり盛り上がっていました。普段発表しない子どももたくさん発言していました。質問がたくさん出ていることに安心していたのですが、心配していた集中攻撃のような場面がいくつかありました。内容的には細かいところに引っかかっている、問いから遠ざかっているような質問が多いように感じました。

子どもの振り返り

・おもしろかった。 ・いろいろな考え方があっておもしろかった。 ・何も言えなかったけど楽しかった。 ・自分と違う意見を聞くのはおもしろい。 ・発表できなかったけど、・・・と思っている。 ・自分の考えていることがはっきりした。 ・次回発言してみたい。

全体的に、楽しい、おもしろいという振り返りがほとんどでした。問いに対する自分の答えと理由を書いている子どもも多く、発言できなかったけどしっかり考えていたことがよくわかりました。

質問の嵐にあっていた子どもも、楽しかったという感想だったので安心しました。

質問の質については、先に述べたように少し残念に思っていました。しかし、授業後の本間先生の話の中で、「子どもの発言は言葉足らずなだけで大切なことを言っている」ということを聞き、その子どもが言いたかったことについてもう一度考えてみました。つまらない質問・ふざけた質問と思っていたものが、問いの核心をついているような質問もあり、あらためて進行役（教師）の受け取り方は重要だと思いまし

た。今までの授業の中でもそんなことが多くあったのではと思うと恐ろしくなりました。

1回目のテーマは身近なものだったので答えやすい反面、問いの答えがその子ども自身に近いので、自分への非難と感じやすいところもあるように思いました。子どもが安心して答えやすいよう、次回のテーマをできれば、少し自分から離れたものにしてほしいと思いました。ただ、自分を語ることも大切だし、授業自体が盛り上がり欠けてしまうのではと思うと、どんなテーマがよいのかわからなくなりました。

② 11月4日（水） 『ぼくたち、みんな平等？』

いきなりテーマが難しくなったので、子どもたちはついていけるかと心配になりました。平等とは何かを理解できていない子どもが確実にいるだろうと思いました。予想通り、1回目と比べて全体の反応はにぶく、2人は途中で思考停止状態になっていました。しかし、前回より質問をじっくり考えている子どもが多く見られました。とにかく思いついたことを言いたいという状態ではなく、自分が聞きたいことについて深く考えていました。

子どもの振り返り

・頭を回転させすぎて爆発しそう。 ・うまく質問に答えられなくて残念。 ・頭をすごく使った。
・平等がよく理解できていないので、大変だった。 ・難しかった。 ・前よりよく考えた。
・前回より質問される人の考えていることがわかった。自分の中でもその人の意見に賛成できるとかできないのかもわかった。前は速すぎて、頭の中が考えきれないくらいだったけど、今回はとても考えている感じがしました。

子どもの振り返りを見ても、難しかったという感想がとても多くありました。しかし、難しいながらもよく考えた、頭を使ったという感想も多く出ていました。普段の授業では難しいで済ませてしまって、それ以上考えないでいる子どもも質問のためのメモを見ると、しっかり聞きたいことが書かれていました。

子どもの振り返りの中で一番気になったのは、Aさんの振り返りです。Aさんはお金持ちと貧乏な人がいるから平等ではないという意見でしたが、努力すれば貧乏な人もお金持ちになれるから平等だという意見を聞いてこんなことを書きました。

平等じゃないと思う。だってお金持ちと貧乏な人はちがうもん。「貧乏でも、がんばれば抜け出せる。」という意見には、少しむかついた。それも私の家は母子家庭で、お母さんはパートさんで、毎日毎日がんばっているのに、いつまでも貧乏なんだもん。お金持ちの人にはわからないと思うけど、今は今で幸せだけど貧乏だと、ご飯だって少ないんだもん。(いっぱい食べたいけど)たくさんがまんしないとイケないんだもん。

Aさんはこの授業の最後に、次回質問を受ける人と決まっていたので、これを読んでかなり驚きました。本人に聞いてみて、答えたかったら答えてもらおうということになりましたが、とても心配でした。言いたくなかったら言わなくていいよ。どうする？と本人に聞くと、考えてみる。と言ってその日は帰りました。

③11月6日(金) 『ぼくたち、みんな平等?』つづき

授業の前にAさんが来て、「がんばって答えてみる。」と言いました。「言いたくなかったら言わなくていいよ。」とだけ伝えるとうなずいていました。

3回目が始まり、Aさんは質問に答えました。振り返りに書いたように、自分の家のことや、質問に腹をたてたことは一切言わず、一つの意見として「努力しても貧しさから抜け出せないこともある。」ということを言いました。その後もたくさんの人からの質問がありましたが、その部分は貫き通していました。次の答えに変わってから、今度は質問者として発言していました。Aさんは普通の授業ではあまり発言することはないほうなので、その変容にただただ驚きました。

3回目は、過去2回と比べて、とても【聞く】雰囲気できていました。前回思考停止していたB君は、質問に答える立場になったこともあり、がんばって答えていました。

子どもの振り返り

- ・言いたいことがいっぱい言えてよかった。
- ・自分が質問されていたらどう答えるか考えた。
- ・3日間の中で一番頭を働かせた。
- ・質問が難しかった。
- ・質問を考えたが、話題を変えてしまいそうだったので、まずいかなと思って言わなかった。
- ・前回より深く考えることができた。
- ・平等とは何かわかってきた。
- ・どういう質問をしていいかわからず、意見になってしまって残念。
- ・今日まだ出ていない答えについて話し合いたい。

3回目で慣れてきているからか、いい質問の仕方をしようと努力している子どもがいました。2回目についてとても頭を使ったという意見も多数ありました。【聞く】【考える】【話す】楽しさを味わっている子どもがたくさんいました。『問答を通して相手の主張を理解する』ことができたのではと思っています。

子どもの振り返り(3日間通して)

- ・『うまく人に伝える』という勉強でもあったような気がする。
- ・一人一人思っていることが違って、おもしろかった。聞けてよかった。
- ・発表していないけど、みんなの意見を聞いて、いろいろ考えられた。
- ・まだまだ言いたい。楽しかった。
- ・あの本を読んで、もっとたくさん考えたい。
- ・1日目楽しかった。2,3日目は難しい。
- ・もっとほかの人の意見を聞きたい。
- ・自分が『考えている』ことを感じた。
- ・『みんなで考える』というのはすごく頭を使うから、大変だったけど楽しかった。

『伝える力』 『考える力』 という言葉が子どもの振り返りの中に出てきています。3日間の授業で子どもたちは、楽しみながら多くのことを学んだと思います。

三日間、自分のクラスをよく見ることができました。自分が普段の授業で、いかに子どもを見ることができているか、ということに気づかされました。場面、場面で子どもの表情が変わるのを見ました。ある質問でわからなくなってしまった顔、悩んだ末に理解できた顔など、普段目にしているはずなのに、見えていないことがよくわかりました。他の先生の授業を見せてもらうことがよくありますが、どんな授業をするのか、どんな進め方をするのかというところばかりを見ていて、子どもの学ぶ姿を見ていませんでした。今回、自分のクラスを他の先生に授業してもらうことで、必然的に授業者の進め方よりも子どもの様子が気になり、また正面から子どもたちを見ることができました。『研究授業は前から参観すべき』の意味が本当によくわかりました。

今後、子どもをしっかり見ながら授業をしようと思っています。

問答法で子どもたちが深く考える姿を見て、子どもの可能性を感じました。知らず知らずの間に、子どものことをこんなものだろうと決めつけてしまっていました。授業の中での学び、育ちについて考えさせられました。聞く力、話す力、考える力、伝える力は、他の授業にも生きてくると思います。また、活かせる授業をつくっていかなければならないと思いました。

1 1月6日（金） 研究全体会 授業後の研究会の先生方の感想

○私にとっては、初めて聞く言葉ばかりでしたが、勉強になりました。質問するという事は、相手の話をよく聞かないとできないことで、人を話をじっくり聞くということが、私自身つい忘れて自分のことばかり話してしまっていたなと反省させられました。子どもたちが真剣に取り組んでいる姿に感動しました。ありがとうございました。

○私は2日目、3日目の授業を少しずつ見せていただきました。子どもたちの1日目の感想の中で、「集中攻撃」という言葉が出ていたように、私もそのような印象を受けました。質問を受けている児童の顔がどんどん赤くなっていき、自分の言いたいことが分からなくなっているように感じました。でも、3日目の子どもたちの感想には、「楽しかった。またやりたい。」「質問できてよかった。」「質問されたい。」などの前向きなものが多く、子どもたちはゲームとして楽しんでいたんだなと思いました。子どもたちの何でも楽しむ力、ステキだなと感じました。3日目の研究全体会の中で、1人の女の子の感想を読まれた時は、ドキッとしました。授業の中、自分のことについて考え、辛い気持ちだったのではないかと心配しましたが、3日目の授業で、自分の背景のことではなく、それを上手に昇華し、自分の意見としてみんなの前で発言できたことは、彼女にとってとても大きな意味を持つのではないかと思います。子どもたちは日々、成長しているんだなと改めて感じました。もう一つ、高橋先生の子どもの関わる姿勢、子どもによりそう姿勢を見て、自分を振り返ることができました。日々の忙しさで、ついつい、ゆっくりよりそうことができていない時もあります。今

回の授業を見せていただく中でよりそうことによって、自分の思いを伝えていける子どもたちを見て、よりそうことの大切さも教えていただいた気がします。

○発表者のところへ、授業者が移動することでクラス全員の視線が発表者に集まり、質問と答えのやりとりがスムーズにできたと思いました。5年生にとっても、むずかしい内容だと思いましたが、子どもたちは自分なりの言葉で発表しようとしており、感心しました。

私たちは、日本語で会話をしていますが、内言語（心の中の言葉）も日本語です。より深い思考のためには豊かな語彙力は不可欠です。自分の気持ちをより正確に表すために、又、他者との微妙な違いを伝えるためには語彙を意識した授業をして、クラス全員の言語力アップを目指す必要があると感じました。教師がしっかり教えて確実に実力をつける授業と、子ども自らが深く考え自分をみつめる授業の両方があれば、クラス全員のアップになると考えます。（月・金共に通級の授業があり研究会に参加できていません。だから完全に感想です。）

○話をどんどん引き出していかれてよかったと思います。2、3回目の話題“平等”に対して、平等に対する定義にそれぞれずれがあったので、話がかみ合わず、子どもたちも発言、質問しにくかったのではないのでしょうか。定義のそろえやすいものをテーマにした方がよいように感じました。また、翻訳ものなので言いまわしも少しなじみにくかったので、もっと日本風な言いまわしや、その本を参考に選択項目をわかりやすく変えて提示する方法をとってもいいのではないかと思いました。しかし、子どもたちは、しっかりと考え、頭の中をめぐらし、日頃発言しない子どもがたくさん発言し、「いいたい！いいたい！」という感じがよく伝わりました。クラスでも、いろいろな教科でとり入れ、自分の気持ちを言葉にして伝える子、人の言葉を聞いて自分の考えを整理し、深める子どもを育てていかねばならないと思いました。いつも新しい試みを提示して下さいましてありがとうございます。

研究授業 1月27日(水) 5年3組 田畑学級 総合的な学習 「人にやさしくしようと思う？」

2学期に大阪大学の高橋先生が藤川学級で行った、フランスのオスカー・ブルニフィエの絵本からの授業を田畑孝洋先生が行う。相互問答法の授業を公開し、授業後に研究会を行った。

第5学年 総合的な学習の時間学習指導案

指導者 教諭 田畑孝洋

1. 日時 平成22年(2010年)1月27日 水曜日 第5校時 (1時45～2時30分)
2. 対象 5年3組 男子18名 女子17名 合計35名
3. 場所 5年3組教室
4. 単元名 「ひとにやさしくしようとおもう？」
5. 趣旨

(1) 教材観

この教材は、テーマに沿ってオスカル・ブルニフィエの相互問答法を使い、相手(提案者)に質問をしながら相手の考えを理解するものである。相互問答法とは、児童の中の疑問を、問いと答えという形で対話し、相手の考えを吟味する方法のことである。普段の会話の中では、相手の話をよく聞くために何度も質問することはない。しかし、相互問答法では何度も質問をする。意見の言い合いでは問答は成り立たず、いきなり意見をぶつけられても、何と回答していいかわからない。「質問する」という相手にかかわろうとする基本的な態度で臨むことにより、相手の考えを知ることができる。質問を通して相手が何を考えているのかを的確にとらえ、一緒に考えるのが相互問答法である。質問することは簡単なことではない。なぜなら、相手は自分の考えと異なる前提や仮説に立っている可能性があるからだ。質問する側は、自分の言いたいことをいったん脇に置き、相手の考えていることを理解しようと努め、相手の考え方に沿って質問しなくてはならない。

相互問答法ではテーマについての答え(仮説)の中から、自分の考えに一番近いものを選ぶ。答えがあらかじめ用意されている分、なかなか自分の考えを頭の中で整理しにくい児童も、選択するのみなので、答えをもちやすい。自分の経験をもとにして、質問の内容を考えることができる。たとえ発表していなくても、問答を聞きながら相手が何を考えているのに興味をもちやすい。

何度も質問したり、質問に答えたりすることで、「話す、聞く、考える」力をつけるのに効果的な教材である。

(2) 児童観

本学級の児童は、自分の考えをもちその考えを発表できる児童、自分の考えはもてるが発表をためらう児童、自分の考えを頭の中で整理しにくい児童に分かれている。2学期にはテーマに沿って書いた意見をスピーチし、発表者にスピーチの内容について質問する「スピーチ大会」を行ったが、積極的に質問する児童はクラスの中でも固定化していた。なかなか質問しようとしにくい児童に対しては「〇〇さん、何か質問はありませんか？」と、こちらから質問を促した。その時に何か質問できる児童と、何を質問

していいのか思いつかず黙り込んでしまう児童がいた。どの教科においても、教科書の中に答えが載っていたり、答えが決まっていたりするものに対しては発表できるが、自分なりの考えを言ったり、自分の言葉で説明したりすることに、発表をためらう児童が多い。ただ、自分の言葉で説明したり、気持ちを伝えたりすることが苦手な児童が多い分、そういった発表があった時に興味を持って相手の話を聞こうとする姿勢が見られる。

(3) 指導観

テーマについての答え（仮説）の中から、自分の考えに1番近いものを選んだ後、なぜその答えを選んだのかの理由を紙に書かせる。そうすることで、答えに対して自分の思いを膨らませたい。自分の答えへの思いが強くなる分、他の答えを選んだ児童に対して「なぜそれを選んだのか」という疑問がわいてくると思われる。その疑問は、その後の質問の時に投げかけられ、相手がどういう気持ちでその答えを選んだのかについて、より興味を持つことができると考えられる。質問する時は、回答者に対して「その答えはおかしい。」「間違いだ。」というような攻撃的な流れにならないよう注意したい。相手がなぜその答えを選んだのか理解しようとする気持ちをもって質問するよう声かけをしたいと考えている。質問している内容がテーマから大きくずれてきている場合は、進行役（担任）が質問例を出て趣旨に戻したい。また、質問者が限られてきている場合は「〇〇さんは何か質問ありませんか？」と、より多くの児童が質問に参加できるように配慮したいと考えている。

6. 本時の展開

区分	時間	学 習 活 動	指導上の留意点
導入		<p>1. 問答するテーマと6つの答えを知る。</p> <p>テーマ「だれにでもやさしくしようとおもう？」</p> <p>①「うん。ぼくにやさしくしてくれる子にはね」</p> <p>②「うーん。やさしくしてもらえなくても、やさしくしなきゃ」</p> <p>③「うん、そしたらおかえしが もらえるし」</p> <p>④「ううん。だって、ぼくにいじわるする子だっているもん」</p> <p>⑤「うん。ごきげんなときはね」</p> <p>⑥「しなきゃ。でないと、みんなにきらわれちゃう」</p> <p>・この中から、自分の考えに一番近い答えを選ぶ。</p> <p>・なぜその答えを選んだのか、理由を紙に書く。</p>	

展開		2. テーマの答えについて、問答する。 <ul style="list-style-type: none"> ・質問を受けたい回答者は挙手する。 ・回答者に「なぜその答えを選んだのか」質問する。 ・回答者は、質問に答える。 	・質問者の聞きたい疑問の答えになっているか確認する。「今の答えでよろしいですか？」
まとめ			

1月27日（水） 研究全体会 授業後の研究会の先生方の感想

田畑先生の授業と授業後の研究会を通して、先生方が自分の日々の授業について振り返られて、新たな知見を得られていることがこの感想から読み取れる。振り返ることによって学んだ新たな知見が、普段の授業のあり方を変えていくのではないかな？

○お疲れさまでした。研究会の時も言いましたが、田畑さんが黒子に徹されたことは、本当にすごいなと思いました。私が典型的な例ですが、教師が授業中しゃべりすぎとよく言われますが、今回のような授業では、特に私などは一回一回にコメントを入れてしまいそうです。子どもたちの発言で一番心に残ったのは、Cさんに対して「“しなきゃ”とか考えるのは、人生を楽しめないんじゃないですか。」です。この子は、その表情を見てもそう思ったのですが、Cさんへの優しさからこういう発言がでたと思います。「自分ならそういう生き方は苦しい。Cさん、もっと楽に生きていいんじゃないの？」という質問者の考え、人生感が出ていました。とても素敵な子でファンになりました。

○普段知っている子どもたちとは全く違った一面を知ることができ、とても新鮮な気持ちで楽しくみせていただきました。どんどん対話が深まり、「相手がホームレスだった場合」などという大人でも返答に困るような話に広がった時、もう少し設定の枠を絞ってみてもよかったのかなと思いました。最後にCさんが「ぼくにとっての大きな優しさとは、ボランティア精神をもって困っている国を助ける位の優しさです。」と言った時に、どんどんやりこめていたDさんが返すのをやめたのですが、DさんはもちろんそこにいたみんながCさんの深い優しさに気づかされた瞬間だったと思います。私もCさんは優しい子だと思っていましたが、ここまでスケールの大きな優しさとは知りませんでしたし、もしかしたら、この問答をしたことによってCさん本人もそれに気づいたのかも……。枠を絞っていたら、ここまで引き出せなかったらと思う。自分のことを伝え、相手を知るという点で、一番印象に残った場面でした。いろいろ考えるいい機会を下さいました。田畑先生ありがとうございました。

○高学年でなかなか発表しにくくなると思いますが、積極的に発表していたと思います。日頃の学級指導と質問法という教材のおかげかなと思いました。先生対子どもでは答えにくくても、子ども対子どもなら答えやすいこともあります。さらにそれを他の教科に生かすことで子ども達の“話す・聞く・伝える”能力が育成するのかなと思いました。

○以前、5-2で哲学の授業を見せていただいて、本間先生にも教えていただいたにもかかわらず、私はやっぱり忘れてしまってるんだなあと感じました。「どんな質問でも、意味があること」であるというのを教えていただいたのに、今回5-3で「もしも～」の話が出ていて、それでは話が深まらないのでは～と考えながら聞いていました。全体会で、本間先生のお話を聞き、前にも教えていただいたのに、なかなか哲学的な考え方をするのは難しいなと感じました。

相互問答法は“自分”を知る上でも役に立つのではないかと感じました。いろんなテーマで、自分がどう考えるかを選択し、どうしてそれを選ぶか理由を考える作業は自分の内面に向き合うことにもつながるのではないかと思います。質問を受ける立場になれば、思いもよらないことを考えなければならないこともあるので、質問を受ける児童は自分の考えというものが、よりいっそう固まってくるのではないかと思います。本間先生は、本心で問答するのではないとおっしゃっていましたが、本心の部分が出ていたり、あえて本心を隠したりしている自分というものにも気づくこともあるのではないかと思います。小学生で自分に向き合う時間があることは意味のあることだと思います。Cさんに質問した児童の中に「優しさがすべてなんですか。」と言った児童がいます。彼女が何を思ってそう発言したのか。彼女はどの番号を選択し、どういう考えを持っているのかが気になりました。彼女の本心の部分の何かがゆさぶられての発言に私は聞こえました。

○「やさしさ」について、子どもたちが思考をめぐらし、それを言葉にしようとする姿が印象的な授業でした。Cさんの表情からも「考える」ことができていると、よくわかりました。彼の「泣きそう」だけど「楽しかった」と書いた感想から、貴重な体験だったのではと思いました。本間先生のお話で、「子どもの本音を知る、語るではなくて、考えるためにどう言えば（すれば）よいかは哲学です。」とおっしゃられたことが心に残りました。私はどちらかという「子どもの本音」が知りたいと思っていたので、考えるためにどう言えばよいかを探ることが重要である・・・つまりスキルを養うことに焦点を当てるべきだということがよくわかりました。子どもたちの表情、田畑先生の姿勢、本間先生のお話、すべて勉強になりました。ありがとうございました。

○授業中に、「アレ？」とか「えっ？」とか思ったことを、授業後の研究会で本間先生が解説して下さってストンと腑に落ちたことが多かった。しかし、まだまだ謎が多く、多すぎて、本筋を見失っているような気がする。最後に田畑先生が「まとめ」的な何かを言って終わると思っていたので、どうまとめるのか興味を持ったが、特に何もなかった。それならば、何をもって終わりとするのか、

ただチャイムがなったら終わった感が強い。パネルー的な質問を受ける人が2人もいてよかったなと思う。もし、いない場合はどうするの？みんなに質問されるのが好きな人というべきか、自分の思いを伝えたい人なのか、どういう傾向にある人なんだろうとふっと思った。3回目ということですが、今まで、質問された人がでなかったことはないんですか？Cさんは素朴で感じがいいという絶賛の声でしたが人間性がみすかされそうでこわいと思う人もいるでしょうね。最初にどの番号を選ぶのかも、心理テストのようです。本音でなくてもいいということだったけど、本音に沿ってなかったら、意見もうわすべりになるんじゃないかと心配。田畑先生、落ち着いていてよかった。お疲れ様でした。

○とても楽しい授業でした。質問する側もされる側も一所懸命に取り組んでいる姿がすばらしかったです。田畑先生のフォローも素敵でした。ありがとうございました。

○今日の研修会では、Cさんたちを通してやさしさを考えるというめあてと手法の位置が多くの人にはっきりしたところがよかったと思いました。やさしさということについてフリートークだとつきつめて考えられない所を、一人の人の考えをじっくり対話によってさぐることで、多面的で生活に根ざしたやさしさを見つめることができました。子どもたちもとてもがんばっていました。

ところで、先日別の研修会で先生方が授業づくりについて意見を出し合う場面に居合わせました。一人の方が“オープンエンドは甘い”という論をあつく展開されました。次の方は面と向かった反論をせず、子どもの心をゆさぶることに（立ち返って）話をされました。次にその柱が中心となりました。大人はその人の考えを尊重するというスタイルをとりつつ、この人は動じない、考えを改めないと思ったら次にいってしまうのだなと思いました。

はじめの人が問答法的にたくさん質問をされたら、私は～が確かめられた、同じですっきりしたと言ってもらうよりは、違っている、なんでそうなのかわからない、部分がもやもやのまま残ったと言われるのかな、ああ、あなたはそうなんですと距離をおかれるのかな、長く追及されることって厳しいだろうなと思います。大人は自分が自分との対話の中で考えをねりあげ、人と話をすることで視点をうつす、ずらすことによって気づく、そして新たに自分の考えを形づくっていくということが自然にできていくのだなと今回意識しました。教師の人権感覚の磨きも話し合いの場面がなければ、同じところ大切どころが確認できないなと改めて思いました。学校の中でこだわって考える場面が設定されるってとても大切なことだと思いました。

○学力的にしんどい子が5人ほどいて、その中の3人はみんなの前で発言していた。このことは本人のがんばりをはじめ、今まで田畑先生が積み上げてこられた成果だと感じました。逆にDさんFさんのような子どもたちにとっては、“問答法”の授業形態ではかなりしんどいのではないかとすると、そういう子なりのめあて・サポート・力のつけ方をどうしてやればいいのかと考えます。

余談ですが・・・授業後さっとC君に声かけをされていたO先生とT先生に心があたたかくなりました。

○田畑先生が問答法についてきちんと勉強して、授業に臨んでおられて素晴らしいと思いました。“話す”“きく”という力が弱い子どもも、言葉が少ない子どもにとっては、まず書いて自分の考えを確認する部分があって安心できたのではと感じました。もう少し少ない人数で設定しても学習できるかなと思いました。

○自分の思いや考えをしっかりと伝えることができるということはすごく大切なことだと思っていますが、なかなかそういう力をつけてやれないと日々反省しています。この問答法が、自分の思いや考えをしっかりと伝える力につながるのであれば、実践してみたいと思います。いい提案をして下さってありがとうございました。

○相互問答法の授業では、どこに焦点をあて、授業をみたらよいのかがまよいました。今回の授業の感想を書かせていただきます。

「質問を通して相手が何を考えているかを的確にとらえ、一緒に考える」「相手の考えていることを理解しようと努め、相手の考え方に沿う質問をする」というのがねらいであったと思いますが、途中からやわらかくも攻撃的で相手を知ろうと努めるものになくなっていったように感じました。

ホームレスの方の話や、もしも話など着眼点がずれてきたときに、ファシリテーターとして、どのように流れをもどしていく言葉かけができるのかとても難しく思いました。

意見交流ができた児童もできなかった児童も自分のことについてじっくり考える機会があったことはスゴク良かったことだと思います。

○今回の授業では、多くの子どもが発言するようになり子どもが哲学できるように田畑先生は黒子に徹する姿勢で進行をされました。今回は、そのねらいが子どもの発言する姿から達成できていたように思います。

また、相手の考えていることを引き出すような質問の質をあげていく必要があるのかもしれませんが。だからと言って、絵本にある模範質問をするだけでは、子どもの質問をする力が育たないと思います。田畑先生のような姿勢で、「もしも・・・」のような質問をする子を認めて聞いて見守る姿勢を続けることで、質問の質についての判断が子どもの中に育っていくのではないかと思います。4、5、6年生ぐらいで段階を持って指導をしていけば、相互問答法は子どもの力が育つのではないかと思います。

多くの先生が参観される中で、私なら少しでも見栄えのよい議論にしようとあくせくするのですが、田畑先生の子どもを信じて待つ姿勢に本当に教えられました。ありがとうございました。

☆相互問答法は、まだまだ課題の多い取り組みといえる。今回の授業を通しての事後の話し合い、感想から課題が見えてきた。

- ・質問される子どもが、自分の家庭の事情等を語ることがあった。質問する側が、配慮に欠けた質問をすることがあった。それらのこと教師の対応の在り方を考える。
- ・これまで取り組まれてきたディベートと今回の相互問答法を比較することで、相互問答法についての理解が深める。
- ・「もしも・・・」という仮定の質問を子ども達が続けることは意味のないことではなく、総合問答法では想定されることである。哲学対話にとっては重要なこととしてとらえ、教師は丁寧に聞き、ファシリテートしていく必要がある。
- ・今回は、担任の教師以外である高橋先生が相互問答法をファシリテートする授業を観察することで学ぶことが多かった。それに対して、担任がファシリテートすることの利点と課題を検討する。
- ・今回使った相互問答法のテキストの翻訳が小学生には難しいのではないか。テキストにある問いの中で子どもが対話するのに適した問いについて検討する。
- ・今回の相互問答法の授業を通して、どんな子どもの資質・能力が育ったかについて評価をする。
- ・相互問答法と教科の関係を考える。相互問答法の手法を生かして、対話のスキルを育てるのならば教科であるなら国語科、現代社会の課題をみつめなおすのならば社会科、自分のことを見つめ直すのならば道徳科について研修を深める。
- ・教科やねらいによって、教師のファシリテートの在り方を検討する。
- ・相互問答法を各学年で取り組み方を考える。全学年を通しては難しいので、まず、4、5、6年生で取り組みを考えてみる。